

M.) p. 338, Academic Press, New York & London, 1972.

8) Amiel, J. L.: In Histocompatibility Testing, ed. E. S. Curtoni, P. L. Mattius, R. N. Tosi, p. 79-81. Copenhagen; Munksgaard, p. 458. 1967.

9) Brewerton, D. A., Caffrey, M., Hart, F. D., et al.: Ankylosing spondylitis and HL-A 27, Lancet, 1: 904, 1973.

10) I. Matsuda, S. Hattori, N. Nagata, et al.: HLA antigens in mucocutaneous lymph node syndrome. Am. J Dis Child, 131; 1417-1418, 1977.

川崎病による coronary heart disease

久留米大学小児科 加藤 裕久
小池 茂之

I. はじめに

川崎病は急性期から回復期にかけて高率に心血管障害を起こすことはよく知られており、これらの中で急死の原因として重要な冠動脈瘤は6ヵ月から1年の経過で regress するものがかなりの数みられる^{1)~4)}。一方、川崎病発症から6ヵ月以上経過した例に後遺症としての coronary heart disease がどの程度にあるかは必ずしも確実でない。私どもは学校保健上問題になっている川崎病の後遺症としての coronary heart disease の発生率、パターンを知る目的で、川崎病と診断された150名について心音、ECG、冠動脈造影で経過を追い検討した。

II. 対象および方法

MCLS 診断の手引きによって川崎病と診断された例について急性期に2回以上の心電図をとり、回復期(発症1~3ヵ月)に原則として全例に冠動脈造影を施行した。冠動脈に異常があった例は1~3ヵ月の間隔で心音、

心電図をチェックし、発症から6ヵ月~1年で選択的冠動脈造影をおこなった。回復期のアンジオで異常なかった例は6ヵ月毎心音、心電図をチェックした。対象は150例で男105、女45例で、発症時年齢は3生月から8才で、follow up 期間は6ヵ月から4年であった。

結果: coronary heart disease を残した小児は150名中12名(8.0%)で、これらの発症時年齢は3生月から8才で、男女比は11:1で男に明らかに多かった。coronary heart disease のパターンは冠動脈瘤5例(3.3%)、冠動脈主幹部の閉塞2例(1.3%)、冠動脈微細変化4例(2.7%)、心筋硬塞5例(3.3%)、乳頭筋機能不全症候群による僧帽弁閉鎖不全3例(2.0%)、アシナジー2例(1.3%)であった(表1)。

III. 動脈瘤の組織学的検討

3生月、8生月で発症した川崎病症例につき、それぞれ発症から2ヵ月、3ヵ月に腋窩動脈瘤を摘出し病理組織学的検討をおこなった。3生月発症例は4ヵ月後に急

表1 Coronary Heart Disease due to Kawasaki Disease

Pat.	Onset of Illness	Sex	Coronary Aneurysm	Coronary Obstruct.	Coronary minimal Change	Infarct.	Papillary Muscle Dysfunct.	Asynersy
M. K.	8 Y	M	+		+	+		
W. I.	6 M	M			+		+	
Y. K.	4 M	M			+			
H. K.	4 M	M			+			
D. N.	2 Y	M						+
N. K.	2 Y	M		+		+	+	
K. M.	3 Y	M	+					
A. N.	6 Y	M	+					
H. T.	4 Y	M		+		+		
T. O.	8 M	M	+					+
M. M.	3 M	F	+			+	+	
K. H.	2 Y	M				+		

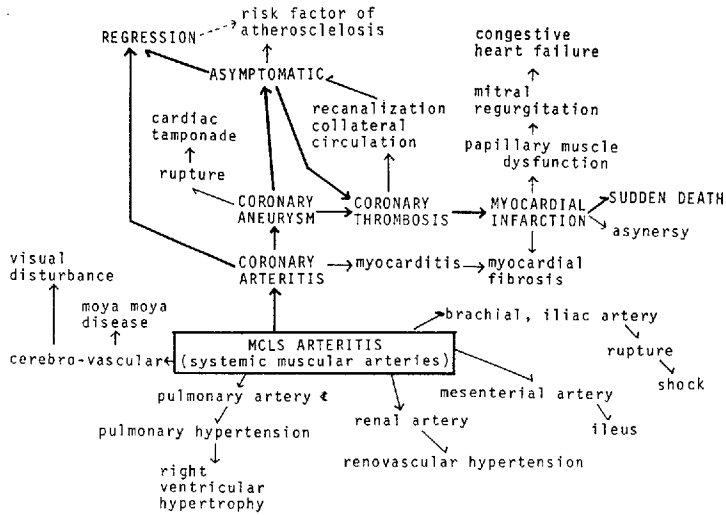


図 1 Clinical Pattern and Natural History of MCLS with Cardio-vascular Lesions

死したため大腿動脈瘤の検索をくわえておこなった。その結果、内膜は著明に脂厚し、内弾性板は断裂し、発症4ヵ月後の大腿動脈瘤の内膜にはすでに石灰化がみられた。これらは動脈硬化の組織像ときわめて類似しており、川崎病血管炎が動脈硬化の risk factor になり得ることを示していると考ええる。

以上の結果から、川崎病血管炎の natural history を図1のように考える。

今後川崎病による coronary heart disease をいかに check し、いかに管理していくかが問題になるであろう。

IV. 結 論

①川崎病に罹患し6ヵ月以上経過して心障害をもっているものを後遺症としての coronary heart disease としてとらえた。②発生率は8%であった。③ coronary heart disease は明らかに男性に多い。④ coronary heart disease のパターンは冠動脈瘤、冠動脈主幹部の閉塞、

冠動脈微細変化、心筋硬塞、乳頭筋機能不全、アシナジーであった。⑤これらの例が学校保健上問題になってくると思われる。⑥川崎病血管炎は動脈硬化の risk factor になる可能性がある。

文 献

- 1) 加藤裕久, 小池茂之, 山本正士, 伊藤佑士, 矢野英二: MCLS における冠動脈病変—冠動脈造影による検討, 小児科臨床, 27: 789, 1974.
- 2) H. Kato, S. Koike, M. Yamamoto, Y. Ito, and E. Yano: Coronary aneurysms in infants and young children with acute febrile mucocutaneous lymph node syndrome, J. Pediat, 86: 892, 1975.
- 3) 小池茂之, 加藤裕久, 富永薫, 久田直樹, 武谷茂: MCLS 冠動脈瘤の自然歴—治療の可能性, 小児科, 16: 855, 1975.
- 4) 加藤裕久, 小池茂之: MCLS において心臓異常, 日本臨床, 34: 248, 1976.

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

.はじめに

川崎病は急性期から回復期にかけて高率に心血管障害を起こすことはよく知られており,これらの中で急死の原因として重要な冠動脈瘤は6カ月から1年の経過で regress するものがかなりの数みられる 1) ~ 4)。一方,川崎病発症から6カ月以上経過した例に後遺症としての coronary heart disease がどの程度にあるかは必ずしも確実でない。私どもは学校保健上問題になっている川崎病の後遺症としての coronary heart disease の発生率,パターンを知る目的で,川崎病と診断された 150 名について心音,ECG,冠動脈造影で経過を追い検討した。